

三重大学附属図書館報

学塔

No. 79 1991. 7. 10

本号の内容

- * 連載：三重大学の将来と図書館
 - (1) 研究者の資料・情報要求と図書館
私たちの図書館について思うこと
人文学部長 長沼 忠兵衛
研究者の資料・情報要求と図書館
工学部長 澤 五郎
- * エール大学の図書館 田中 晶善
- * 開架図書の利用と入力
- * 図書館のサービス ③
情報検索 (1) (参考調査係)
- * 資料紹介 百科事典あれこれ
- * 著者寄贈、主要日誌

連載：三重大学の将来と図書館

(1) 研究者の資料・情報要求と図書館

私たちの図書館について思うこと

人文学部長 長沼 忠兵衛

○はじめに

「図書館のあり方について」というのが与えられた課題である。日頃大いにお世話になっているとはいえ、私はこのような課題について体系的に考えたことはない。したがって素人の思いつきにすぎない

ことを、最初におゆるし願わねばならない。また、ここの図書館に、私がどんなに愛着をもっている書物があるか、どんなに貴重な書物があるか、書物をどう読んでほしいかというようなことは、別の問題であるので、ここでは触れない。更にまた、図書館の扱う資料には、近年、マイクロフィルムやビデオテープその他も含まれてきているが、ここではそれらをも「書物」として考えていく。

○研究・教育のために書物の充実を！

多くの人がそうだと思うが、読みたい書物を借りに行くことが図書館との関わりを始めであろう。それは、或いは友だちの間で話題になって、或いは先生や先輩に勧められてであるかも

しれないが、とにかく自分の読みたい書物を借りに行くことから図書館との関わりが始まると思う。そのとき、図書館の良否の判断は、自分の求める書物を多く蔵しているか否かという、自分本位の基準によりがちである。

しかし図書館の運営に思いをはせ、書物の収集・購入に直面すると別の思慮が働く。例えば学生の指導に必要な書物の収集の問題である。大学には基本図書や学生用図書あるいは大型コレクション購入の予算もあって、毎年購入されているが十分とはいえない。自分たちの研究分野にとって必要な書物の収集は、自分たちが気を配らねばならない。

現行のようにして書物を収集することでよい図書館ができるであろうかと思うこともないではないが、三重大学は総合大学であり、多くの教員が研究・教育にはげんでいるのであるから、教員が備えたい、読ませたいと考えたものを集めることによって、不必要な重複さえチェックできれば、広い視野にたち、多くの利用者を満足させる図書館として充実がはかれるであろう。

○版本の比較を必要とする分野への理解を！

ところで、多くの書物を備えると同時に、厳格なテキスト批判にたえる書物の収集が大切である。しかもそうは言っても、書物によってはなお原形の復原や解釈について研究途上であって、版本の比較を必要とする場合がある。古典といわれるものにもこのような例に事欠くことはない。従来手にすることの出来なかった版本が図書館に収められたときの、その分野の研究者たちの喜びは格別であって、印象に強く残っている一つを紹介したい。

平安時代から代々儒道を以て天皇に仕えてきた舟橋家が、その蔵書を某大学へ寄贈するということがあった。これはその記念講演会における吉川幸次郎先生の話である。先生の話はおよそ次のようなものであった。即ち

中国の古い書物が印刷され始めたのは宋代以後であり、今日、中国で広く流布しているのは宋代以後の版本である。その流布本を読みながら、自分は、そこに使われている例えばAという語は古典の時代にはなかった語ではないかという疑問を、これまで抱き続けてきた。ところで今回寄贈された書物は宋代以前のものであって、一寸みただけでも自分の疑問が解けるのが

ある。研究の進展に大きな手がかりを与えられ感謝にたえない。

以上のような先生の話は、同一の書物でも、版本の比較を必要とする分野への理解を求める。

○利用し易くするための条件整備も！

図書館は書物の充実をはからなければならない。しかし充実と並んで、利用し易くするための条件整備にも力を入れる必要がある。それには、学生に私たちの図書館の蔵書全般とくに自分たちの研究分野の蔵書について紹介し、資料の検索方法を修得させ、また大学図書館相互のネットワークの利用を教えるなどの教育がなされなければならない。他方、現在各研究室に収められている書物のうち、多くの利用者に開放することのできるものは開放して、図書館に行けば簡単に利用できるようにすることの検討も必要であろう。これらの中には金や人手を要するものもあるが、人びとに広く呼びかけながら前進をはかりたいものである。

とにかく、図書館を研究・教育のために有意義に活用していくために、予算ももちろんだが、その運営に対しても全学の知恵が出しあわされることをねがう。

研究者の資料・情報要求と図書館

工学部長 澤 五郎



科学技術の高度化、総合化、国際化が急速に進展する中で、大学における創造的な研究を活性化させるために、教育・研究の組織と設備・施設の体系的計画的整備が急務となっている。とくに、学術情報を的確迅速に収集できるシステムの整備が今後の研究の推進の鍵を握っているといっても過言ではない。一昔前までは、研究者にとって、一次情報（主として学術雑誌）が附属図書館に網羅されていることが夢であった。その夢は現在でも変わらないが、学術雑誌の種類、論文数の増大、内外の会議録や技術レポート数の需要の増大、

雑誌類購入費の増大と各研究者が関係する分野の拡大などのため、現実的でなくなってきている。むしろ、学科・講座並びに附属図書館で購入収集できる学術雑誌は減少し、網羅的収集が進んでいる外国雑誌センター及び日本科学技術情報センターの利用並びに大学図書館間相互利用による文献複写に頼る比率が増大せざるをえない現状にある。将来の夢としては、高度な電子図書館システムの開発により、学内LANを介して端末機で一次情報も入手できることであろうが、当面、ファクシミリの利用及び通信・連絡業務のシステム化などを進めて、文献複写の入手までの更なる時間短縮と価格の低減が強く望まれる。

近年、あらゆる専門領域はつねに他の専門領域と重なりながら、学際的に進展している側面から二次情報の収集の必要性も増大しており、情報検索システム並びに所在情報システムの整備も益々重要になってきている。本学附属図書館でもOPAC(Online Public Access Catalog)により、図書、雑誌の目録情報のデータベース化が進められつつあるが、学内の資源共有と2重投資の回避という観点からも有意義である。

研究者に必要なもう一つの情報として、従来ハンドブックやデータブック類に依存していた物理・化学に関する数値、現象、物理などに関する情報である。これらは日々追加、更新され印刷物ではすぐ陳腐化するとともに、その検索に膨大な労力を要するようになってきている。これらに対して、原子、分子から各種材料に対する構造、物性から合成法について、更に各工学分野における事象に関するファクトデータベースとそのデータベース、ディレクトリの作成が各国立大学、国立研究機関や日本科学技術情報センターで作成されており、運用されつつある。三重大学でもこれらのデータベースを更に効率よく利用できるシステムの整備とデータベース作成にも貢献できる体制を作ってゆく必要がある。

昭和55年1月の大学審議会の文部大臣への答申「今後における学術情報システムの在り方」より10年余を経て、創立五周年を迎えた学術情

報センターを中心に、大型計算機センター、各大学図書館、情報処理センター、外国雑誌センター、共同利用機関、更には、内外の他の情報システムとのリンクにより形成された学術情報システムが整備されつつあり、二次情報検索及び専門領域データサービスに利用されつつある。一方、7月1日施行の大学設置基準の一部改正においても、従来からの図書、学術雑誌などについての量的基準から質的基準に変更されて、これらの系統的整備とともに、情報処理及び提供のシステムを整備して学術情報の提供と他大学との協力を努めるものとされている。また、その機能を発揮させるために必要な専門的職員をおくものとされている。

このような状況の中で今後、三重大学附属図書館は三重大学情報処理センターと更に密接な関係を保ちつつ、学術情報システムの学内システムが整備されるよう望まれる。これと併行して、一次情報の入手の形態も変化してゆくものと思われるが、過渡期に於いて、反って、その入手に支障がないよう、全国の動向を把握して学内学術雑誌収集の合理化と文献複写の迅速化を年次的に計画的に進める必要がある。

自然環境に恵れた三重大学キャンパスに学術情報が的確迅速に入手できるシステムが整備されれば、他に類例のない抜群の教育、研究環境となることが期待できる。

エール大学の図書館

田中晶善

89年7月から約一年間、米国エール大学に滞在する機会を得ました。エール大学はいわゆるアイビーリーグの一つで、1701年の建学以来すでに300年近い歴史を持つ、米国の代表的大学の一つです。その歴史の長さを反映して、学内には様々な資産がありますが、膨大な蔵書を誇る図書館はその代表的なものです。

中央図書館とも言うべきものは、ゴシック建築の美しいスターリング図書館で、人文・社会

科学系の書物を中心に375万冊を蔵しています。15層に分かれた、すこし薄暗い書庫の内部に入ると、多彩な言語による圧倒的な量の書物の全体が、時代と地域を越えた一つの独立した別世界を作っているような思いにとらわれます。

書庫各層の窓際には、パーティションで区切られた机と椅子がぐるりと備え付けられ、登録すれば一定期間、必要な資料を常駐させて小研究室のようにして使うこともできます。

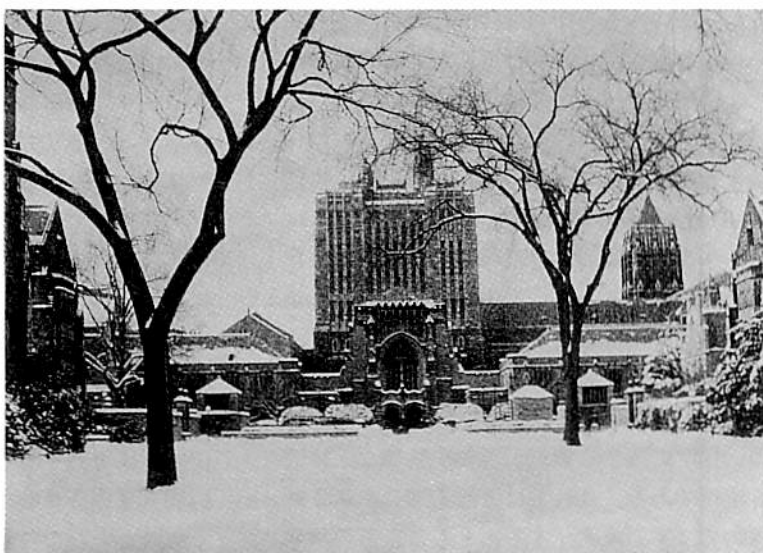
大学内にはこのスターリング図書館の他に、50を越える図書館あるいは図書室があり、たとえば神学部は36万冊の書籍と7万5千部のマイ

クロフィルムを持ち、また音楽学部も11万冊を蔵し、これらをすべて合わせるとエール大学全体としては約950万冊を持っています。この数は大学としては全世界で2位とのことでした（一位はハーバード大学の1100万冊）。

スターリング図書館にはグーテンベルクの聖書が陳列されていたり、また創立初期からの蔵書の中にニュートンから寄贈されたプリンキピアがあるとのこと。

これらはひとまず別格としても、蔵書の数のみならず質という点においても著しいものがあるように思われました。いわゆる稀覯本の類も多くあるようですが、基礎的な資料、特に雑誌類の充実度（多種類のもの創刊号から揃っていること）にはしばしば感嘆させられました。

もちろん書籍・雑誌の数が多く、質が良くても、これらに簡単にアクセスできなければ役に立ちませんが、最近ORBIISという検索システムが導入され、書名、著者、テーマ、キーワードなどを基にして容易に欲しい本を探すことができます。この方法で検索できるのは、全蔵書の一割にあたる90万冊に今のところ限られています。それでもきわめて便利なものです。その端末は全学のあちこちに配置され、だれでも好きなときに自由に利用することができます（利用者の多い所では一か所に数十台の端末が並んでいる。）更にエール、コロンビア、ハーバードの諸大学およびニューヨークパブリックライブラリーを結んで、書籍を相互利用できる制度と検索システムもあるとのことでした。他にもいわゆる商業データベースに直接アクセスできる端末が閲覧室に備えられているところもあり、無料（おそらく）で利用できます。利用法がわからなければ、常駐している専門のライブラリアンに聞くことができます。



Yale College Introductory Information 1989-90 より

図書館の開館時間も利用者の利便に合わせて、学期中は休日を含め深夜まで利用できるようになっており、私が親しんだ化学科の図書室などは事実上「24時間営業」と思われるほどでした。

エール大学の歴史は、書籍の寄贈に始まっており、大学案内を読むと、「エール大学の歴史はライブラリーの歴史」「ライブラリーの成長は大学の発展の忠実な反映」「ライブラリーは大学の心臓部」といった表現に頻繁に出会います。本稿の冒頭に「歴史の長さを反映して」と書きましたが、エール大学が大学図書館として質・量、共に世界最大級の蔵書を誇るのには単に歴史の長さだけの理由ではなく、立派なライブラリーを作ることを強く意識して努力してきた結果だ、と言えるようです。それも、狭い意味での大学自身のみならず、学外からの寄贈による場所もきわめて大きいようでした。私が最も頻繁に利用したクライン・サイエンス・ライブラリーはクライン・バイオロジー・タワーという市内で最も目立つビルの中にありましたが、この建物自身がクラインというエール大学出身の実業家の寄付の一部というような調子です。コモンウェルスの意識のなせる業でしょうか。

図書館の内部はどこもきわめて静かで、文献を探しているとき・机に向かっているときに聞こえる唯一の「騒音」は、蛍光灯がかすかに発

するジーという音だけ、というのも普通の光景でした。

一年後にもどってきた本学の図書館はびっくりするほど立派になっていましたが、それでもエール大学のそれと比較するとかなり見劣りがするのは確かです。しかし歴史の長さや大学の予算規模の違い（文字通り桁違い）を考えれば、本学は大健闘しているとも言えます。今後の充実が問題のすべてであり、それは（ひとまず）本学の構成員の一人一人がいかにライブラリーやライブラリアンの仕事を大切に考えるか、に大

きく依ると思います。

閲覧室でおしゃべりをしたり、飲み物食べ物を持ち込んだり、あるいは図書館の周りを含めキャンパス内を騒音と共にバイクで走り回ったりすることを、とんでもないと感ずるのか、それとも取り立てて不思議とは思わないのか——こんなことにも、今後の三重大学のライブラリー、従って三重大学自身の成長を占う鍵の一つがあるような気がします。

（たなか・あきよし、教育学部助教授、化学）

開架図書の遡及入力

はじめに

本学の蔵書の探し方、すなわち、どのような図書がどこにあるかを検索する仕組みが、従来のカード目録から、コンピュータを利用する方式に変わってきています。本紙を読んでくださっている方々や図書館を直接利用なさっている方々は、当然、すでに気付いておられることでしょう。図書館の端末機や、研究室のパソコンに向かって、コンピュータから検索する仕組みについては、これを図書館はOPAC（オパック、利用者用オンライン目録検索）と称し、さかんにPRしており、その効果も、そろそろ現われてきているものと期待しています。

検索の対象となるコンピュータの中味、すなわち、お馴染みのカード目録でいえば、図書そのものと、その在りかなどについての記載事項にあたるものを、コンピュータの中に記録する作業についても紹介しております。本誌の78号（1991.1）の「図書館のサービス③ 全学の図書所在情報の形成」です。その中の目録作業の部分について要約すれば、図書を探す道具として、従来のように、図書に関する情報を目録カードに記載し、カード目録を編成するというのではなく、コンピュータにデータを蓄積し、端末から検索できるようにしているということ、そして、その作業は、学術情報センターの目録システムを利用して行われ、本学の蔵書のデータは、学術情報センターと、学内の情報処理センター

の両方のコンピュータに、いわゆるデータベースとして蓄えられているということです。

とはいえ、上記のような方法で、全学の図書に関する情報をコンピュータに蓄積しはじめたのは、1989年4月以降受け入れの図書からです。60万冊にもものぼる蔵書の記録の蓄積であるカード目録とは、少なくともその数のうえでは、比べようもありません。

遡及入力

そこで、データベースの中味の充実が必要であるということになりました。1989年度以前の図書についても、データをコンピュータに入れてやろうということです。（図書館ではこの作業を“遡及入力”と称しています。）ですが、50万冊を超える蔵書のデータのすべてを遡って入力することは、大変なことです。必要なものを、計画的、段階的に入力していくのが、現実的かつ利口であると思います。そして、最初の入力候補となったのが、一階に開架されている学生用図書のうち、1989年3月以前受け入れの分約7万冊ということになりました。

その第一の理由は、当館は教官よりも学生の利用が多く、学習図書館としての役割が主になっている現状からも、学生諸君が、新しい検索の方法を使って、自分達のために用意されている図書を、より有効に活用してもらいたいと考えたからです。学生用図書は、学生の利用を主に考えて購入されているものでありますが、結構、教官の利用に耐えるものも含まれていること、量的に1、2年の事業としてこなせそうで

あり、しかも現物が図書館にあるということ、などの理由もありました。

入力作業

昨年4月から作業を開始しました。学生その他のアルバイトの人たちを主に、職員に時間外動員までかけて作業を進めました。学術情報センターにすでに登録されている（われわれは、“NCファイルにヒットする”といっています）図書から入力していきましました。すでにデータベースに登録されているものは、入力が簡単にかつ短時間ですむという理由からです。その結果として、昨年度末までの一年間で、5万冊強のデータの入力を終えたとともに、書架上の0門から9門までの全分野を一巡することもできました。これで、貸出中などの理由で書架上になかった図書と洋書を除き、主要なものはひととおり入力できたと言ってもよいと思います。

やり方、中身などは変わりましたが、今年度に入ってからも、作業は継続して行われています。二巡目に入ったから、学術情報センターに登録されていない図書の登録もしていこう、といったことなどで、能率はうんと落ちますが、今年度中に学生用図書のすべてがOPACで検索できるようにしたいと思っています。

参考までに、6月末の数字をひろってみました。

週及入力図書の冊数が、和書54,695冊、洋書1,600冊、合計56,295冊です。ちなみに、週及入力以外の、日常的に受け入れ処理されるすべての図書も合せた総冊数は、98,664冊です。ほ

どなくデータベースの中味が10万冊の大体になることになります。

なお、一巡目で見送られた洋書についても、すでに0門から4門までの入力が終わりました。

おわりに

前に、データベースの中味の充実といいました。カード目録にとって代わりつつあるOPACの中味が、このような週及入力作業で数量的に充実することは確かです。今後も計画的に事業(?)を進めていくべきだとの意見もあります。ただ、質的な面からもみなければなりません。カード目録と比較しての優劣は意見の別れるところかも知れません。機械音痴の人もいるとか、また、図書館だけでは、どうすることもできない部分もあります。昨今のOPACへの動きには、総合的な判断が働いていると考えるべきなのでしょうか。いずれにしても、カード目録が主役の座を追われることは間違いないことのようなのです。

さしあたって、図書館としてできることは何でしょうか。利用者の皆さんが、求めるものを探し、その結果をよいものにするための研究と努力を怠らないように心がけることでしょうか。

OPACの特徴、検索の方法などのPR、使い勝手の改良など、まだやるべきことは多いようです。

利用者の皆さんには、OPACをおおいに活用していただくとともに、ご意見をお寄せくださるようお願いする次第です。

(専門員・谷口益雄)

|||| 図書館のサービス④ ||||||||||||||||||

情報検索 (1) 参考調査係

図書館の一階、ちょうど真中あたりに、参考調査係のカウンターがあります。学生の皆さんがよく利用されるのは、図書館の本をコピーするために申込みに来られる時でしょう。また、何々についての本はないか、といった相談をしにこられた方もおられるかもしれません。この他にも本学にない資料の取り寄せなどを行っていますが、あまり学生の皆さんが知らないサー

ビスとして、電算機(パソコン)を使つての情報検索があります。

これは電話回線を使用して、外部のデータベースサービス機関のを利用するもので、現在、学術情報センター、国文学研究資料館、JOIS、DIALOG、STN Internationalのデータベースが検索できます。ただしこれは有料ですので、会計制度上、校費からの支出という形でしか利用できません。学生、院生の方は教官の指導のもとに利用することになります。

具体的な検索の方法は、探したい雑誌論文、

研究報告などを、いくつかのキーワードを入力することにより見つけだすというものです。従来から、そのために索引誌、抄録誌といったものが雑誌形式で刊行されており、本館にもいくつか備えてあります。けれども、たとえば化学関係の世界最大の抄録誌「Chemical Abstracts」になると1ページ当たり約十数件の抄録、八百ページもの雑誌が毎週刊行されるという状況にあり、目指すものを探しあてるには多大の時間と労力を必要とします。これを簡単に手早く探したそうということで、このようなシステムが誕生しました。

今回と次回で本館で検索できるデータベースサービス機関を簡単に紹介します。今回は文部省所管の機関です。

* 学術情報センター NACSIS-IR

ここには図のようなデータベース（現在30種類が利用可能）があります。外国のデータベースもいくつかありますが、学術情報センター、あるいは他の機関と協力して作成したデータベースが増えてきました。

* 国文学研究資料館

全国からマイクロフィルムで収集した写本・版本の目録を検索できる「マイクロ資料目録データベース」、ここが所蔵する和古書の目録を検索する「和古書目録データベース」等があります。

以上2つは図書館で検索できます。

この他に大学の大型計算機センターにも約130種類のデータベースがあります。たとえば

学術情報センター

COMPENDEX	工学の文献(米国)
ISTP & B	科学技術の会議録文献索引(米国)
EMBASE	医学・薬学の文献(オランダ)
SciSearch	自然科学の文献・引用文献索引(米国)
Social SciSearch	社会科学の文献・引用文献索引(米国)
A&H Search	人文科学の文献・引用文献索引(米国)
Deutsche Bibliographie	ドイツ語圏で刊行された図書雑誌の雑誌データ
JPMARC	国会図書館図書目録(日本)
LCMARC(Books)	米国国会図書館図書目録(米国)
LCMARC(Serials)	米国国会図書館雑誌目録(米国)
目録所在情報データベース(和図書)	大学図書館所蔵和図書の目録・所在(日本)
目録所在情報データベース(洋図書)	大学図書館所蔵洋図書の目録・所在(日本)
目録所在情報データベース(和雑誌)	大学図書館所蔵和雑誌の目録・所在(日本)
目録所在情報データベース(洋雑誌)	大学図書館所蔵洋雑誌の目録・所在(日本)
科学研究費補助金研究成果発表データベース	科学研究費の研究成果報告の要旨(日本)
学位論文索引データベース	国内博士論文の索引(日本)
データベース・ディレクトリ	大学等で作成・運用しているデータベースの一覧(日本)
学会発表データベース 第一系	電気・情報・制御関連学会での研究発表要旨(日本)
学会発表データベース 第二系	化学関連学会での研究発表要旨(日本)
化学全文データベース	化学関連学会誌論文の全文(日本)
電子学術論文データベース	先端科学技術分野の原書論文の全文(日本)

東大には「CAS(化学に関する文献情報)」、京大には「ERIC(教育学関連文献情報)」、阪大には「BIOSIS(生物学の文献データ)」など幾種類ものデータベースがありますが、現時点では図書館からは検索できません。

ただし先の2つも含めて、本学の情報処理センターの端末、あるいは接続している研究室の端末から、各機関に申請して、利用者番号等を取得すれば利用が可能です。詳しくは情報処理センター「広報」の各巻末の説明をご覧ください。

資料紹介

百科事典あれこれ

まず百科事典、これが何かを調べる時の合言葉といったら大きさですが、使い方によって、かなりの範囲のものを見つけたすことが可能です。たとえば、たいていの百科事典には索引がついており、本文の項目にあがっていない言葉からも検索できるようになっています。

また、この事項は、よくわからないけれどもどうも数学に関することらしいということがわ

かっていけば、まず「すうがく」の項目をみて、そこからいもづる式にたどっていくことも可能でしょう。こんなふうに関念的なことをこれでおさえて、より深く専門の事典や図書に向かっていく、これが百科事典の勉強や研究をするうえでの一般的な使われ方だとも思います。

このほかにも、ひまな時、パラパラとめくりながらながめているだけでも楽しいし、外国の百科事典は語学の勉強などにも使えると思います。まだまだいろいろな使い方が考えられる百科事典。図書館に所蔵しているもののうち、特

色があるものを紹介してみたいと思います。
(配架場所は貸出カウンター前、机つき書架及びその周辺です)

* 日本大百科事典：Encyclopdia Nipponica
2001 (小学館 1984-1989) 全24巻 索引
本文中にカラー写真や図版がたくさん含まれている。またすべての項目にはないが、それについての参考文献、参考図書が掲載されており、より深く追求するときに便利。また日本地名の主な項目に国土地理院発行の20万分の1、5万分の1、2万5千分の1地形図名がある。

* 21世紀百科：カララマ (主婦と生活社 1979)
全24巻 索引
名前の通り、各ページの約半分がカラー図版でしめられている。イタリアのモンドール社の「Colorama」を原典として、日本向けに編集したもの。

* 万有百科大事典 (小学館 1973-1974)
全20巻 索引
これは普通の百科事典のように項目がアイウ

エオ順に並んでいるのではなく、1：文学、2：美術、3：音楽、演劇というように、ジャンル別に別れている形式のもの。

* ブリタニカ国際大百科事典 (ティビーエス・ブリタニカ 1972-1975) 全24巻 リファレンスガイド 6巻 総索引 参考文献
イギリスの「Encyclopaedia Britannica」の日本版。本巻は大項目主義で、ある主題を細分化せず、一つの項目にまとめ、詳しく解説し熟読に耐えるものとなっている。別巻のリファレンスガイドは小項目主義、一般的な言葉からひく事典で、関係する本巻の項目名があげられ、両者を組合せて活用する仕組みである。

主な外国のもの
* Encyclopedia Americana. 29v.
* The new encyclopaedia Britannica. 15th ed. 29v.
* Brockhaus Enzyklopädie. 19Auffl. 24Bd. 刊行中
* Grand dictionaire encyclopédique Larousse. 10v.

■■■■■■■■■■ 著 者 寄 贈 ■■■■■■■■■■

大原 興太郎・生物資源学部助教授
秋津 元輝・生物資源学部助手
共著「都市と農村を結ぶ」(財団法人 富民協会 1991年)
服部 範子・人文学部助教授
「Mechanism of world accent change」
(篠崎書林 1991年)
地村 彰之・人文学部助教授
共著「チョーサーの『公爵夫人の書』を読む」(シリーズ英文学シンポジウム第5集)
(学書房 1991年)
第2部 5「言葉の遊びについて」担当

■■■■■■■■■■ 主 要 日 誌 ■■■■■■■■■■

1月22日(火) 第3回附属図書館運営委員会
1月30日(木) 東海地区大学図書館協議会講習会

於：大同工業大学図書館) 横山参考係長参加
1月30日(木)～平成2年度国立大学附属図書館事務部長会議 (於：松山市) 澤田事務部長出席
3月6日(木)～大学図書館国際シンポジウム (於3月7日(木)：京都外国語大学図書館) 谷口専門員出席
3月12日(火)～J O I S 研修会 (於：日本科学技術情報センター名古屋支所) 樋本係員参加
4月22日(月) 東海地区国立大学図書館協議会 (於：静岡大学附属図書館) 高橋館長、辻本事務部長、木村情報サービス課長出席
4月26日(金) 第1回附属図書館運営委員会